

近世
談
霜夜星

卷之一

1299
13



卷 13
1279
5



繪師小孫

戊辰初月
新板

此者 程氏

鳳亭
手梓

霜夜星序

余

余罹其疾屏居讀書夜已初更門有剝啄聲家
僮起而應之則友人種彥子也乃謂余曰吾為
一大事因緣來余驚而徐問其故種彥子曰霜
夜星一編既成剝剝告竣將以布世但所少者
足下序文而已盍以速成諸余因思數月前已
有其約以塵事紛々如猬集加旃衣食于奔走
未暇構思也就架上檢之種彥子所贈草稿在
焉取而朗誦一遍乃言曰天道恢々疎而不漏

明治三十九年九月二十九日
水谷三孝氏寄贈

霜夜星序

積善有慶積惡有殃此古人真實語也夫伊兵衛花兒相見于路傍也名士佳人才貌匹敵目挑心許兩意已融液矣若是時而婚焉則琴瑟好調鳳凰和鳴何不善之有唯其流離落魄伶仃孤苦各各東西萍斷音絕一則踪跡不定囊空罄纔賴澤兒以餬口一則被棄棍徒落乎花街終向快保帳下為羔酒兒可見二人之緣於是乎休焉既而紙窗故紙認花兒筆移居芝濱鑽穴竊玉百般不善自是兆則安知不好因

緣卽惡因緣乎此舉也使伊兵衛棄糟糠之妻花兒辜負于恩人二人為人之輕佻可以知耳媿婦冤魂為祟父子立地下世不亦宜乎求次郎於津嶋則不然也少年情痴事遊冶桃花流水各各有情更無驚蝶負心之行其殺于官太夫則真々有數耳凡物過濃則歸淡過淡則為濃此理之常無足怪者也花兒津嶋之為尼亦復爾爾彼則思從前積惡漸々來報愛着毒心一時消盡矣擲玉簪而代念珠棄紅裙以着緇

衣積年之思為讖悔滅矣此則情人死賊事起
非常頓思人世夢幻茫茫無定遂奉佛行脚此
二凡所異也夫水滸小說中第一書也請舉一
二以論之打虎一也武行者以智黑旋风以力
殺婦人一也宋公明出於不得已武行者直情
銳往在於報仇耳此其所以稱妙筆也今種彥
子之作此編才子佳人其事稍同而其意則異
矣母乃劫擄水滸乎種彥子莞爾而笑曰然自
是燈下劇談不覺移時僮僕輩在傍者昏然

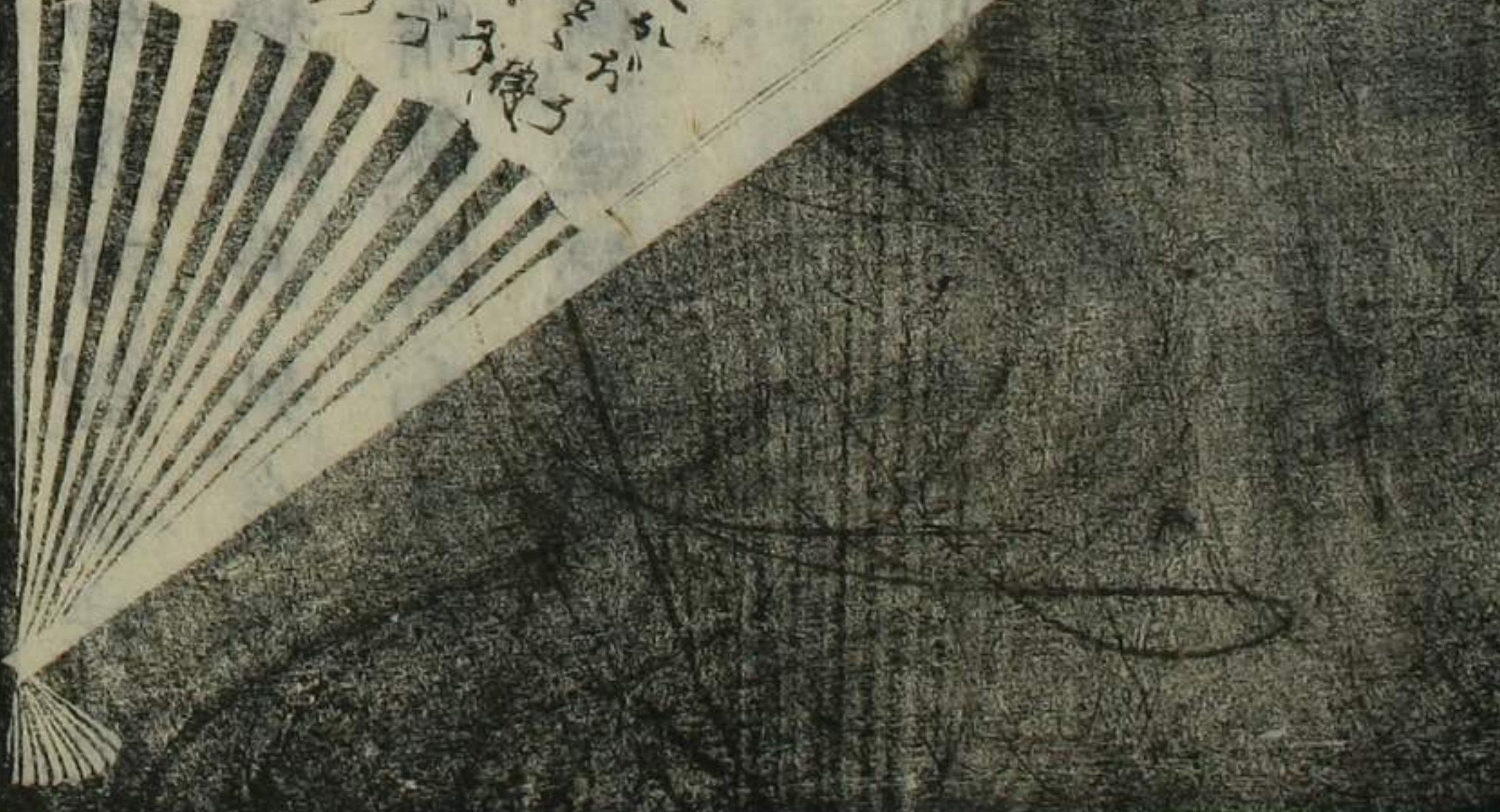
睡種彥子曰今日之會談論如湧可謂愉快也
唯恨序文不成耳余曰此編機軸既妙矣何待
余文而輕重惟足下與余交情最密而更無一
言以弁卷端則後世其謂之何遂錄前言以為
之序

文化丁卯歲孟冬朔日

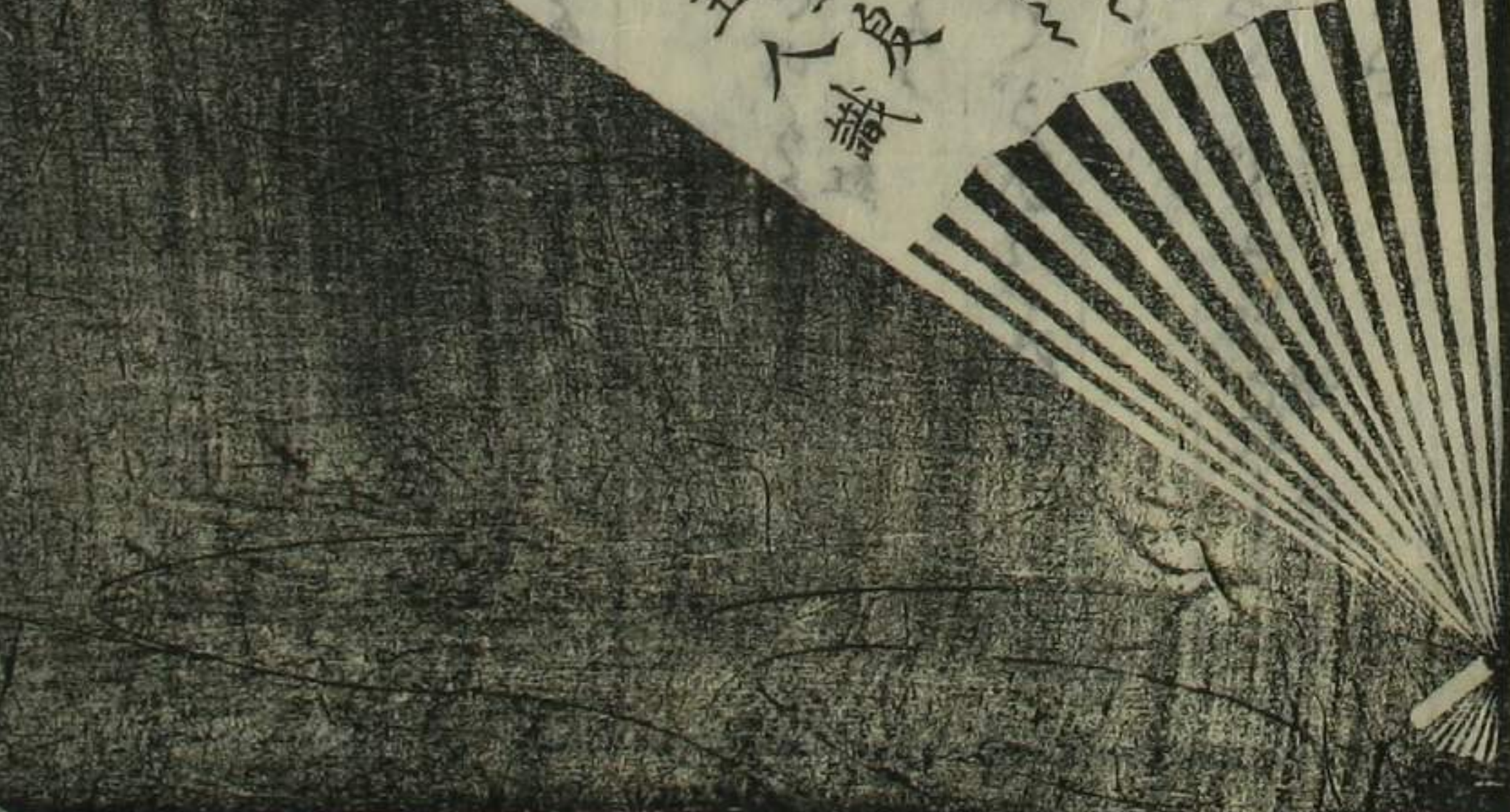
江戸柏菴玉丞撰



Handwritten musical notation on a fan-shaped paper fragment, consisting of various notes and symbols arranged in a curved pattern.



Handwritten musical notation on a fan-shaped paper fragment, similar to the one on the right page, with notes and symbols following the curve of the fan.



柳 柳 柳
柳 柳 柳
柳 柳 柳
柳 柳 柳

霜 夾 生 星

奇支
 古屋
 茶器
 空
 怪支
 堤
 鉦
 鼓

霜 世 烟 談

光明寺
 六浦
 紅糸
 暴雨
 浦
 苑

霜世烟談

三

侍女歌次



側女於花



於澤寬鬼

蘇武

高西伊兵衛



御書

澤村

宿夜星表之一

卯月官太夫



宋夜星表之一

花方求次郎





近世怪談而相夜星一卷

東都 種彦 著



機語上 和田山乃也と

日ハ暮る雨ハつ野ハ神ねれて旅路ふさのひうさりうと法詠ふと
多ハ鉦うららしてゆげハ上總國益本林觀世音菩薩ハむじ當國橋井
とハ野ハ蜜をあぬる農夫あり。それガ娘と波本とハ且ハく起タハ
ぬるさ小月をいふ。ワラ遠ら茶釜加の海ハ出て。あうちあやれハ
実ハく生親男ハつハ一日ハいど此山を過ハ觀音の立像あり。雨
体ハくぐをまじら。己ガさるる笠を御仏ハあさやハのせ。あしハ五月雨
のとがうる苗ひらて居るハ不思美ヤ光明赫奕ト。降下る雨ハ

巴樓妓女津島墨跡
あまのこころ
あまのこころ
あまのこころ
あまのこころ
あまのこころ

いづれおのむそ
めづらむらん
かへらわさむ
まのんまれの
やの
うづらう

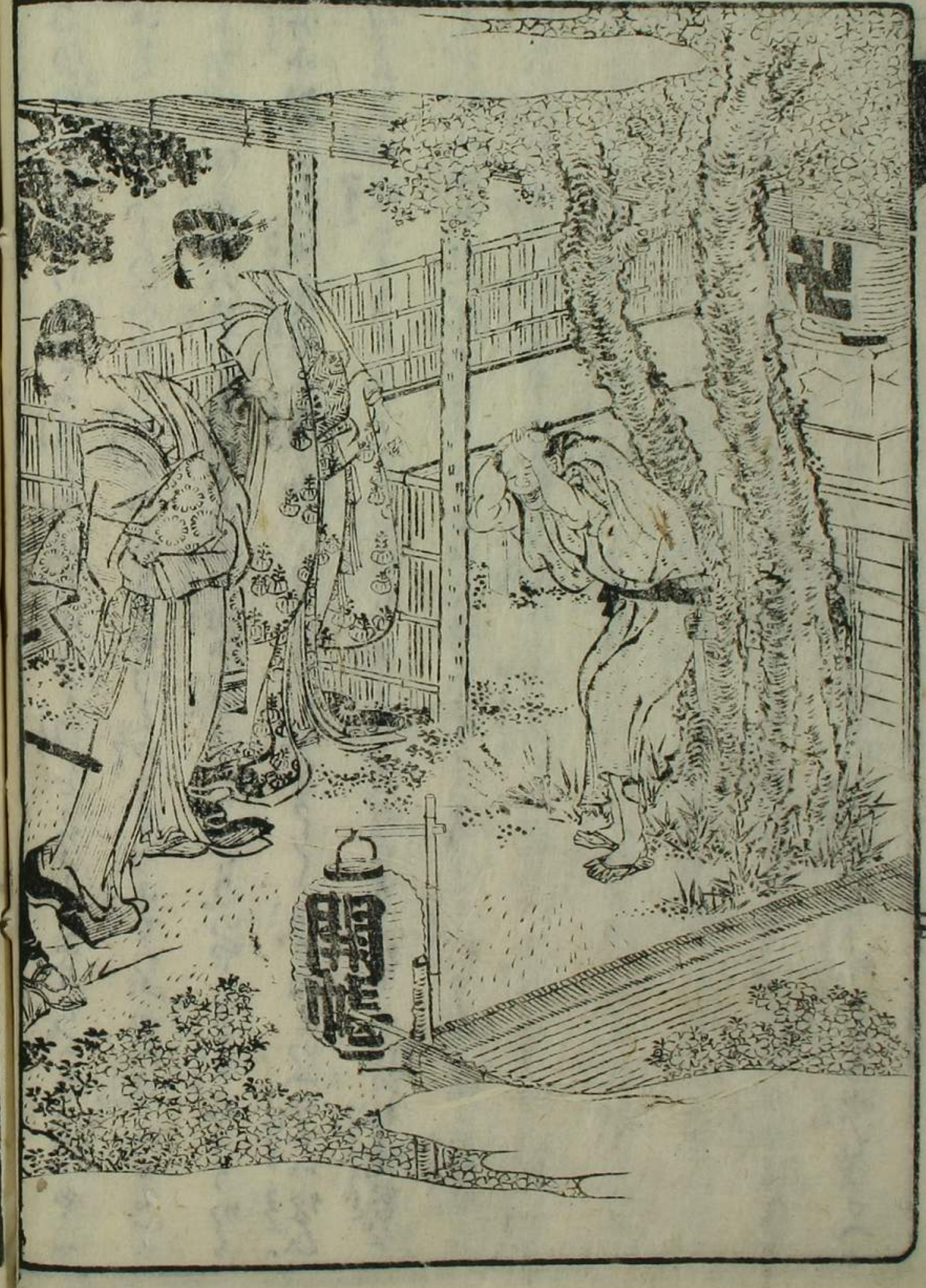


暮ゆく春をみむ桃花のてく。胸の百まぢの糸をつるねしむくく(を)し柳の
 眉けうらうらる髪のかり。みわひあるつうつん。途ふらうつまも鳥ゆい。華のくも
 正でまらひいざう人。伊去清神うあひて斜めちや。邂逅小人と生れし方の
 かる美人を書とまりてふと。世ふまむいひもあつらふと。公のうらみあひひは
 人とまふ。降ともまらぬ春雨のちうくと負ふれば。うやねとてもなと口ま
 こも。花のめとある。末亭ふ想ひてそれやをむく。彼女二人も同じ麻札小腰
 おうらぬ。おれうら。珍更とひれた出ま媒といらうら。伊去清茶など飲をら
 う。相管をまさうらうのとなしつて出らる女まらう小物やさん無礼され
 と。つづれうらうらわ(つ)らうせふと。着や恋のふづるまもあうらんと。つと馴く
 く回ひくれば。おねとがしきか言へて。それがまよあつらとおの者ふては。い
 が不幸あして良人小まられ。親をさげと。叔父なる者當國千種の浦ふまむいし。

おれをさのまらうらつら。つと。是れも尋あひぞ。冷まへあう。近思なる草らう仁王と
 て。往古孝女の心願ふて。一夜小三及の草をとりぬ。いしとやう。土人。口碑小抄
 玉ゆふ。鄰村の。まらる花子と中娘と只二人。膝をひらぬ。まらうの。庵ふせ。この
 らにまらう。からう。伊兵衛が体面うらまらぬ。のりくや。いし。細く。お
 がこれ。伊兵衛も。おら。何とや。縁由。いし。ねど。使る。いし。の。お
 東あ。おら。まら。玉ゆ。花子と中人の。端正。いし。顔色。好く。楊家。深窓。と。出
 一玉環。の。まら。月も。ね。花も。ら。む。粧ひ。まら。何と。一。嘉。塔。お。も。ら
 ぬ。む。や。と。い。花子も。顔。さ。と。あ。う。め。ま。う。両。親。小。ま。ら。れ。と。う。う。洋。清。舟。の
 へ。の。の。う。ら。ん。ま。や。も。う。く。は。う。と。自。然。と。眼。中。小。情。を。う。く。ま。伊。兵。衛。清。を。え。れ。ば。
 此。方。も。心。と。れ。り。け。ど。お。の。て。中。人。を。こ。い。ひ。う。の。言。ま。も。あ。う。と。や。せ。や。は。う。く。や。せ
 ず。と。う。う。ら。む。ふ。う。う。か。山。の。お。ね。男。洋。ま。ら。う。と。あ。お。ま。ら。う。や。う。て。頭。ふ。て。

いへうへうのり
てうわてうわ
いあわわわわ
わわわわわわ
わわわわわわ

百五十五



百五十六

孤鬼のあとある極あり。除ふととらりし舟橋の繩をさうらておろし
 をんふ。和田山とて一の高山あり。春ふもあつねを地して雲香あひのり。
 吾泉云外うらち惟松寺栢枝をまどへ。まじんかみとゆ月もあつねの冷る
 ちつとて衣襟の中ふつ。若滑るる丸を幸して攀登れ。一宇の辻堂と
 びんりのあり。青苔染をす。縁の板床ありて半朽。供物も出峯のあじみす
 也。金糸を降雨ふらう。暁の赤玉をくれて蓮坐のうそはひをそ人愛や
 ぶれて香石絶の香をく。船からして月常住の燈をわぐ。その物さうら
 つらさるし。あやしむべ。草堂のうらふ女の叫ぶ声あり。さそそとと
 てんふ一人の女ふ本丸をうけ堂の柱ふい。あむれ。今一人ハス男上ハ
 思髪をたのひふ。右のめめて柄もさうら。と。心持をさうら。と。あ
 として此鮮血谷川へうれ。まら山賊のうら。と。腕のねくもえせ。



いひよらへんびやに
 しのつとそららあひ
 やれんまきあひのり
 やまのうらちのあり
 まじんかみとゆ月も
 あつねの冷る



新編浮城物語



その二

新編浮城物語

十六



いひつゝへんせし
こころしんせし
つりつゝせし
かたむらさき

雨夜皇卷之二

十七

おてうればゆきと刀振人とせしむさつこつうさそし銭あつて極の
 板をつらぬ死一ゆふのやうにて持めた仙前あつし紫銅の花瓶てうり止
 れば水と流れても負の負へうらとひとく。あつ叫ぶ声のゆやふ又切つ
 じぶ。ゆりらういて黒くする仙をまふふ切さけう。彼山賊も下とや
 らひり口ふ念とし短笛吹らうせ。その岩咎くこの樹林も。いづれも暖
 帽ふ白をつてこ早賊あつと十余人もふ佩りあつておてうれば母
 兵あついうものうらうぬと。只頼彼女をさそりんと。あをそと切むと
 ぶ。相手の手勢と山路小ら。北軍さべ。谷をかゝぬこふ岩をさそりて透を
 うんとつりぬ。伊兵衛の名をゆい。中條兵衛之助が流をさ。依不利
 流の奥美をさうら眼光三乱。微塵割秘術をつし。さそりてふ動さ。ど
 れも十分の危急うらふ。雪上ふおをさうらうとやん。不思議やふ動動し。

一陣の風吹来く。雲上り月光照れ小く。漸く胸裏里霧あつとゆ。あつ
 をのべて掌をさそりてさふいしてうらも岩とあつと。只声をさそりて切
 ら音をさそりてさふいしてうらも岩とあつと。只声をさそりて切
 ら方へ逃人とと。あつとをさそりて追さうら。あつととと。あつととと。
 されば。あつととと。あつととと。あつととと。あつととと。あつととと。
 かひひあつととと。あつととと。あつととと。あつととと。あつととと。
 しく。堂のうらへつて。あつととと。あつととと。あつととと。あつととと。
 氷をさそりて。あつととと。あつととと。あつととと。あつととと。あつととと。
 斜小降雨。あつととと。あつととと。あつととと。あつととと。あつととと。
 く。雪止山足の方をさ。あつととと。あつととと。あつととと。あつととと。
 のりう。あつととと。あつととと。あつととと。あつととと。あつととと。

あつらん此多勢ふてふも取
ふがととあはじと。かあら
てとらと倒れ人ごらへま
またり

機語下

光明寺

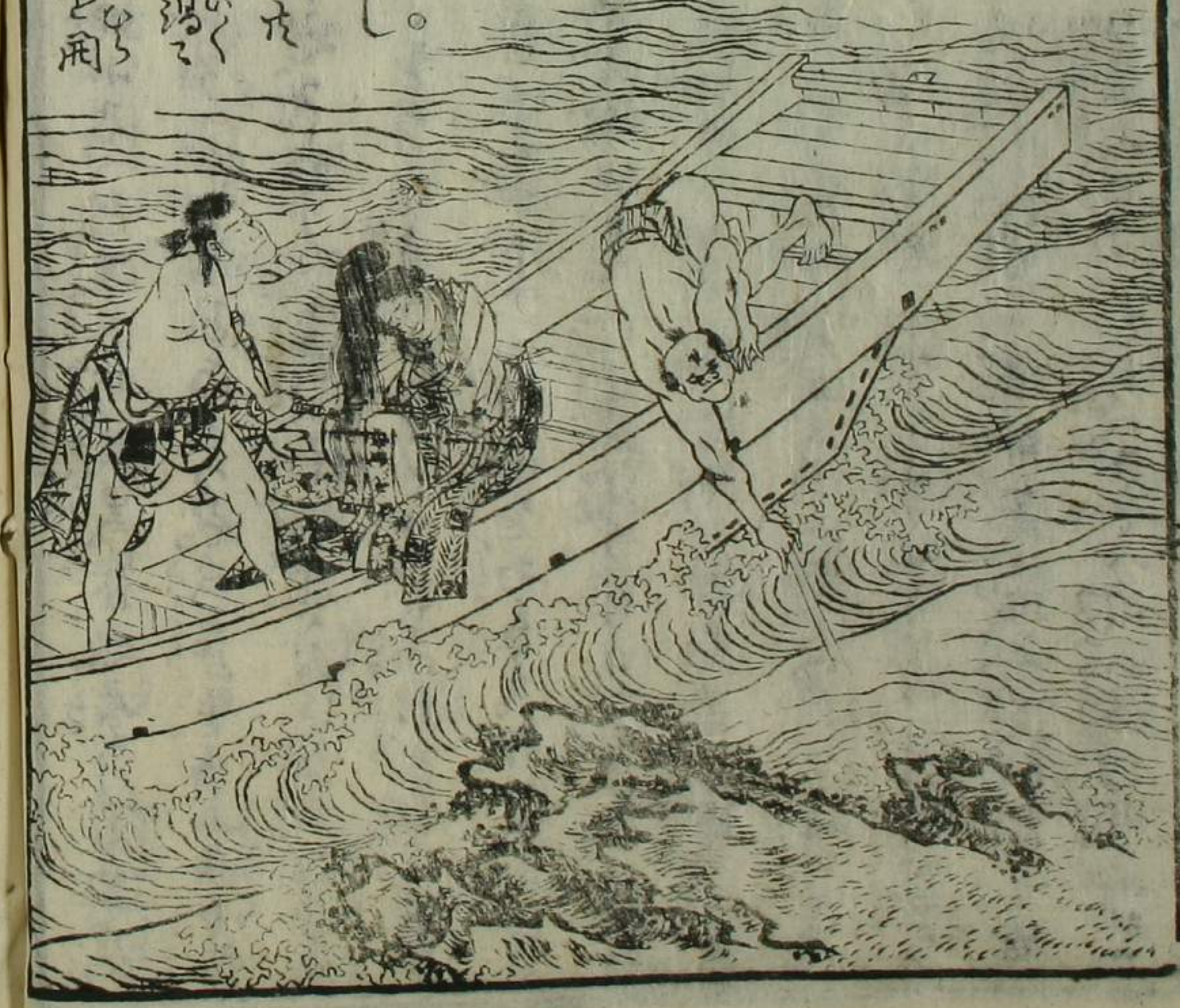
形見の舟

伊兵衛ハ和田山ニ阿比

さうみ正氣あつらしづこ成

あく雲板のこゑ幽ふゆ(露)

さう香烟皇中よりつて。目を飛



けハ幢幡風ニ閃々須弥壇の上

ふ蓮花部の印をむとびひひ。

阿弥陀如来おまほして。蓋蓋邊

豆の器は燈明の火くけうつ。

ふをゆたふぐちとて板のあく

も高浮塔をそまれば極楽より

さしうと。いふうつ四方をえれば。

一人の長を伊兵衛が側よりさ

とあやえらう。旅人かをまつめ人

此所ハ前夜相賊と戦ひひし和

田少の藤光明寺といふ蘭若あり。



旅人遂に得あつるふらして所の村長を食ひ火をくゞし其がまられよ
と客を誘ひ引かぬ公認ふそらみくまらりありしうら美をあそ
むのせし果して再生をぬひぬ何等様故して盗賊と疑ひこ
まひしや其始末をうらむへとねもころふ少やるよ伊去清てめ
て正氣の言ふといやうして寺僧の介抱を謝し前夜旅店
座されふて花をかう清水を汲鮮血をまゝひては堂ふつらいつ
こつら者まねねと盗賊の苦しめられし女子をくゞけんとほ
細田山小次郎ひりをくゞり俄に山の崎劫せしとよておちもろく俗
くたれん長老をうねていつの賊をやくま小女をあられし自己の命
もつらふとる仁心あれが其がつらうも恙なく養生ほひし
と見一々の因縁なるもつらの頃らういつらる極故といふことこ

これと此和田山小次郎の及羊頭の矢の根此二品をくゞつらへし者
みどりふ登ることをゆるさざる若拙てふ登るせば大両へう或は天龍大
地ふかりてお殺さるもあつ又ハ日ごらの木の枝頭上ふかり又ハ
めつて斬ぐとく。兩段ふらうて人命をかこせしめのもあつとやん
旅客幸ふして刃小恙なりとわらね果して伊去清が刀の園う
らの無銘ふして乱やさるうれば爰ふわいてふあれし極故を
まう。彼刀側よりありかりをさうあけえれば。その紫銅の鑿瓶
ふて戦いゆゑやん又恋くこぼれ鏝のくくふらりう。おわかく
のこれ佩刀ふてさうひこびりゆゑ。伊去清のともろく盗賊一人
ふもおとれざんじと漸緑されふあゆいで。几顔とあふ清水を
流る石盤の水香人と水画ふらうつら。顔あえれば色ハ瓢の板ごらう

唇へのよりの涙を合ふ小惚らう。かろ如へるや伊去清との
 れ来るし邑老らどめ。のまうこの土人申れ旅人小い蘆生あふやと。
 蓮あさんごとのふゆのものを行ふふゆらう。あふゆればあさんごど土
 ひらら捨るく来るもあう。又ハ祭るらうぞく。かひゆる子つ泣もかま
 つど。人かどけて来るもあう。傍らうゆれそれくの泣ゆれの五鹿磯
 蛭蚓あうの二章ハわうゆゆのふんぢうあうぞく。あうらうぞくぞく。あ
 中ふもふらうかあうらうが旅人あや薬師ふてもゆむえんかお見
 てゆひあへととてゆれば側らう旅人とも賊の同類あうとゆひ
 一ももたふゆあうぞく。あうらう戦あふゆ方あうふもゆゆゆ
 旅人ふも纏りゆ人となしとらうなど。同話あう口ふゆゆらう。あ
 漸水あう。かあうゆふとあひいで。あうふても彼女あうゆづの者

中ふんと四十そらうの男小同ぢればかとこ答てゆゆハ夜前殺れ、
 妖あて本凡うけゆ賊のいざあひゆゆハ於花あゆゆ妹あうとゆゆ伊
 あ清あゆゆびあゆゆ山賊とあひゆゆの昨日笠森観音あゆ我
 小芒鞋をゆゆあゆゆし男あゆゆ又忙しく花子と連て立退ハ
 ともつゆの面体の男あていらゆやとゆゆ。あゆゆとゆゆの男ハ雲舞
 の半六とも悪視らうらう。あゆゆ花子とあゆゆひ。ゆゆ妻あゆゆとゆゆ
 来て。ゆゆなる花街ゆもゆゆゆし。金をゆゆ高妓ゆゆ人とあゆゆと
 ともゆゆ妖あゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 て見え。斤腕あ落され地藏堂の椽の上あゆゆ。ゆゆゆゆゆゆゆゆ
 刀あてもゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 側らうゆゆゆゆの子とあゆゆ。十五あゆゆ小女あゆゆハ花女郎ハ

つらなる悪提小捕われ浦泊の土奴小もろりきたるはひつらん日
頃かへへやさしく此さそ一衛もぞれくの日されふとへると波
うらむらん都びとる言はのうら小突あつて歎とぞえぬ侍は清席
と丁度うつて今ぞ知る草とう仁王のかつらふ席むれしむび
一。花子姉妹ふてあつらるるいづくつらる人とあつて船人と
あつらるるもぞるれざるは糸のあつてまうんととらつくと涙あふ
お里人ぐいふはさそひ彼花子と相知るふ所方ふてゆるひしやと
一の簪と出さし和田山の草堂小からうらるるなればせめてその
うらそとも思ふはしとへと流しる伊去清飲びつらうあつてんしと
李の花のいん唐紙つれらふみ條停小やさうひしとれええへあ
花子が銀釵へ肉つれし髪のももつらつらあつてあつてんしと
あつてんしと

毒小みわらうらつらつらわかけんとあつらるとれ髪も乱れつらんとい
よえらぶく涙めしと波種とあつらうらうらうらこのあつての四十とらうの男伊
去清ふむらひ。これら都らうらうらうら清誼小初仕するてあつらる刻彼
お花が足芦部兵衛といふものとわらうらとらうらへて住居はしけるお
彼姉妹の身の上仔細知らゆる彼お花が足兵衛といふ者い虫
一。殺さるる生質ふて佩刀急抜目貫小柄まで南無仏の文字と用
るゆえ時の人異名して念仏兵衛といひしが。かうとれおつらうてお
仏菩薩のらうらふもあつらびとらえや。姉は狂賊小殺され妹はつらう
昔やうの人南無仏の文字つきさうら佩刀親つかうと日ひまで
彼家小ありしが。今塵一うらえの前夜半たが盗えとらしめのあつ
と。流るる伊去清の怨氣ふとえとあつてんしと

花子いづる村里ふさまふい土妓傀儡とあつと旅客小錦帯をゆ
 るともも。公きみと清きよとけいあまふ再まびさうい出いさんゆのをと。五三日らの
 知しふととらう。口くち末すえとふくし常つねのゆらみひれううてまづ長老小別と
 つげ。奴あねのまま骸がひとあつと葬まうり香花かうかのまま頂たかふふのままかか寺てら傍そばの
 らんく小布施ふせをあらん。やうて出いで酒肉しゆにくをううひる石いし碑ひふふうう
 そい。いいんんどどの奴あねおおああつつ。栞しやく門もんの額がくううららええれれの音信山おんしんやまととり
 風流ふうりゆうの道みちももかかととううたたれればば夫木集ふきしづふ
 時ときももいいづづねねままつつれればばいいままららんん音ねつつれれふふゆゆめめうう
 夫おとことと事ことふふれれどど花子はなことと尋人じん小音信山おんしんやまののかかととれれををままててややまま死し
 人とと公きみふふ誓ちか言げんひひ旅りゆう宿しゆくふふうう。骨こつ柳りゆう脚きゃく半はんなどなどととままとと行装ぎやうさうとと
 ととのの人ひとむむああつつふふ縮毛しゆくまうのの神かみとと伏ふせせるる。ととれれううううしてして杖あはののつつののああまま

ぞらせらると蘇す一いち千種せんしゆの浦うらををああととふふええるるしし舟ふねののううららふふままししれれをを
 風かぜああららししとと水みづ主ぬし楫こし取と重石じゆうしやくととひひたたああげげ。催馬さいばああららぬぬ掉つりううとと小
 旅りゆうののううららととままととれれ。蕭せう颯さつととるる風かぜふふううせせ。小こ烟えん形がたとといいふふ舟ふね小こああげげるる。
 此下伊去清武彦ここのちいせいきよたけひこのの因いんふふののひひれれ。於澤おのさわとといいふふ媿けい婦ふののりりとと接脚せつきゃく誓ちか
 ととままうう。ああららししびびむむたたふふららううののひひ。おお沢さわとと傍そばううてて去さししととああどど。十じゆ余よ
 年としののううらら種たねののののままららううののうう。いいままららんんたたれればば洋やう小こ説せつをを。
 下回したまわはは花はな方かた求もと次郎じちろうとといいふふ處ところ士しののののままららううををめめるる。推量おしりやう知しららじじ。
 一いち巻まきとと棧せき語ごととななしし。二に巻まきををささししてて一いち回かいととももけけ巻まきををららううばば
 二に巻まきのの別べつふふああららううのの物もの始はじとといいふふまま首くび尾び詳しょうふふ知しららへへ

霜夜星一卷畢

